

朝鮮半島・日本列島比較陶磁文化論序説

—高麗時代及び併行期を中心に—

小川 裕紀

1 本稿の目的

日本列島の古代・中世陶磁と外国陶磁との比較研究については、前者に対する後者の影響関係を中心に分析が進められてきた。初期須恵器や白鳳期緑釉陶器については朝鮮半島陶磁、律令的土器様式期の須恵器・奈良三彩・平安期緑釉陶器・灰釉陶器については、中国大陸陶磁・金属陶磁との影響関係の分析が中心となっていた。また、日本列島中世陶器については、一部の器種・意匠を対象に朝鮮半島陶磁との比較分析が行われてきたが、中心的なものは中国大陸製品との比較分析、いわゆる「モデルとコピー」論であった。

こうした日本列島陶磁と外国陶磁との比較研究においては、日本列島におけるモデル受容形態の独自性や主体性が論じられることが多いが、ややもすれば自民族中心主義に結びつく可能性があるのではないだろうか。特に日本列島古代中世陶磁の科学的な窯業技術史的研究が進展した 20 世紀後半は、日本国の陶磁産業と陶磁芸術も発展の途にあったことや、“「世界最古」の縄文土器の発見”等により、自民族優越史観に基づく歴史記述が行われやすい時期であった。

近年、陶磁をめぐる状況は大きく変化した。主な事項だけでも、日本陶磁産業においては廉価量産品部門での外国産製品との競合や食器文化の多様化、陶磁芸術においては「伝統」・「個性」・「実用」への分化や偏重があげられるだろうか。一方、外国陶磁史研究の進展がめざましく、特に韓国における朝鮮半島陶磁史研究は長足の発展をとげている。従来、日本陶磁と朝鮮半島陶磁との比較は研究状況の制約上、主要生産種のみ焦点をあてて行われてきたが、現在は朝鮮半島陶磁史において各時代の陶磁文化の総体が明らかにされつつあり、朝鮮半島と日本列島における陶磁文化の様式論的比較分析が可能な条件が整おうとしている。そこで本調査研究では、特に研究の進展と蓄積が著しい高麗陶磁と併行期の日本列島陶器を統一的な視点—技術系譜・機能(器種)・中国大陸陶磁との模倣関係の要素によって総括的に比較考察し、両者の特質を明らかにすることとしたい。

なお、本稿は 2009 年 7 月 4 日—5 日に愛知県陶磁資料館で開催したシンポジウム『東アジアの陶磁の道を探る』における調査研究報告の一部を文章化したものである(拙稿「朝鮮半島と日本列島の比較陶磁論ノート—初期鉄器時代から高麗時代・南北朝時代(日本)を中心に—」(『シンポジウム「東アジアの陶磁の道を探る」資料集』愛知県陶磁資料館・愛知中国古陶磁研究会 2009 年))。本調査研究報告は、トヨタ財団 2007 年度研究助成「東アジアにおける陶磁生産技術の伝播について

の調査研究—江南、嶺・湖南、瀬戸内を結ぶ陶磁の道—の成果の一部である。

2 朝鮮半島高麗陶磁と日本列島平安期施釉陶器

高麗時代の朝鮮半島陶磁のうち、近年調査・研究の進展・蓄積がめざましい分野が高麗青磁、特に初期高麗青磁である。その概要は大阪市立東洋陶磁美術館『高麗青磁の誕生』(芸術拠点形成事業大阪市実行委員会 2004)年に窺うことができる。また、筆者も2009年6月に京畿道始興市・芳山洞窯跡や全羅南道康津郡の諸窯を踏査し、遺物を実見することができた。初期高麗青磁の成立については、年代に関して各説があるが、中国大陸・越州窯青磁の直接的技術移入によって朝鮮半島中西部の博築窯が成立し、後に南西部の土築窯へ青磁の生産主体が移行することが明らかとなっている。製品については灰青色硬質陶器系・金属器系・中国陶磁系があり、椀の高台形態の比較分析を中心に、中国大陸・五代の「玉環底椀」に類似した「先蛇の目高台椀」が成立した後、前代の喫茶器としての「玉壁高台碗」の形態影響を受けて「内底曲面式蛇の目高台」→「内底円刻式蛇の目高台」へと変化していくことが確認されている。すなわち、高麗青磁は中国大陸陶磁の直接技術移入によって成立するが、器種系譜は多様で、中国陶磁系は中国大陸陶磁の形態影響を受けつつ型式変化がなされて展開した点に特徴があるといえる。

一方、同時期—平安期—の日本列島陶磁では、特に施釉陶器を中心に従来から中国大陸文物との比較考察がなされてきた。近年の研究状況は尾野善裕「灰釉陶器生産技術の系譜」(『榑崎彰一先生古稀記念論文集』真陽社 1998年)や、齋藤孝正「越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器」(『日本の美術』409 至文堂 2000年)に窺うことができる。灰釉陶器生産の成立については、年代に関して各説があるが、三叉トチンなど新技術の導入が認められるものの外来技術の直接的導入は未確認で、既存の須恵器生産の独自の発展や鉛釉陶器生産技術の一部導入が想定されている。製品については、須恵器系・金属器系・中国陶磁系があり、椀・皿類を中心に中国大陸文物—金属器及び青磁—と形態や陰刻文などの意匠が類似し、一部に「蛇の目高台」製品が認められるが、灰釉陶器は一般に断面方形の角高台から量産化に伴い断面三角形の「三日月状高台」へと変化し、11世紀代には新たに同時期の搬入陶磁である中国大陸白磁の形態影響を受けて型式変化していくことが確認されている。すなわち、平安期の日本列島施釉陶器は中国大陸陶磁の直接技術移入は認めがたいが、成立期には中国大陸文物の影響を受けた製品が多く生産され、その後は列島独自の型式変化をしつつ中国大陸陶磁の断続的な影響を受けて展開した点に特徴があるといえる。

朝鮮半島高麗青磁・日本列島平安期施釉陶器ともに、中国大陸陶磁の影響を受けて成立・展開しているためか、両者ともに中国大陸陶磁との比較考察は従来から行われてきたが、一方で朝鮮半島高麗青磁と日本列島灰釉陶器の比較考察は行われることがほとんどなかった。これは、外国陶磁との比較考察が一部器種の形態比較によってなされていたためであるが、両者の特質は技術系譜・機能(器種)・中国大陸陶磁との模倣関係の要素による総括的な比較考察によってこそ明らかになるのではないだろうか。本節では、先に確認した中国大陸陶磁の直接的技術移入の有無が朝鮮半島高麗青磁と日本列島灰釉陶器の成立・展開を大きく分かつ要因となっていることや、中国大陸陶磁意匠の受容内容、展開過程における変化のあり方といった要素に、両地域の独自性を見ることができるところを指摘したい。中国大陸陶磁の直接技術移入によって成立した朝鮮半島高麗青磁が、やがて「翡色」とも称される精製で半島独自の高麗青磁を展開して「高麗化」を遂げるに至ったのに対し、中国大陸陶磁の直接技術移入が認めがたい日本列島平安期施釉陶器は、そうした展開過程をとらなかった。こうした生産技術や意匠の違いのあり方に、中国大陸の周辺地域であっ

た朝鮮半島と日本列島の、中国大陸陶磁との“距離”の違いを想定することはできないであろうか。次節では、本節に続く時期の陶磁について比較分析を行ない、考察を進めることとする。

3 朝鮮半島高麗青磁と日本中世施釉陶器

高麗時代の朝鮮半島陶磁のうち、数多くの優品を擁する高麗青磁、特に「翡色」とも称される12-13世紀すなわち最盛期の精製品については近現代の韓国・日本ともに関心が高く、多くの調査・研究が展開されてきた。初期高麗青磁は中国大陸青磁の直接的な技術導入を契機として成立したものの、12世紀台には半島独自の器形・装飾と美しい釉調を有する精製品へと発展を遂げたことが明らかとなっている。一方、同時期の粗製の高麗青磁については近現代の両国ともに関心が低く、韓国・ソウル市内の主要美術館・博物館や康津等の博物館においても展示例は少ない。しかし、発掘調査例は皆無ではなく、筆者も2009年7月の全羅北道扶安郡柳川里窯跡(7-5)の調査を実見したほか、愛知県陶磁資料館所蔵の李吉秀コレクションにおいても「緑青磁」とも称される海南産青磁や粗製の青磁椀が含まれている。後者は愛知県陶磁資料館『李吉秀コレクション』(2008年)において窺うことができるが、器形においては統一新羅時代の陶質陶器の系譜を一部引く、粗製品であることが分かる。12-13世紀代の高麗青磁を考察するにあたっては、こうした精製品と粗製品の階層性を考慮する必要があるだろう。

一方、同時期の日本列島の施釉陶器については、いわゆる古瀬戸を中心に多くの調査・研究が展開されてきた。近年の研究は井上喜久男「中世の施釉陶器」(『中世の施釉陶器』愛知県陶磁資料館 2002年)や藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』高志書院 2008年)などに窺うことができる。中世瀬戸窯施釉陶器の主要器形は中国大陸陶磁に由来し、特に13世紀代には中国大陸陶磁に次ぐ威信財として機能したが、製作技法や装飾文様については列島独自の展開をとげたことが明らかとなっている。朝鮮半島高麗青磁と日本列島施釉陶器の影響関係については、締腰形瓶子を中心に影響関係の有無が論じられてきたが、影響関係や考察自体が極めて限定的である。なお、同時期の東海地方諸窯で生産された無釉の粗製椀・皿・片口からなる通称「山茶椀」については、系統分類と精緻な型式編年が行われている。

朝鮮半島高麗青磁と日本列島中世施釉陶器の比較分析は、従来一部器種の形態比較によってなされてきた。しかし、これは極めて限定的で不十分な考察であり、技術系譜・機能(器種)・中国大陸陶磁との模倣関係の要素によって総括的に比較考察し、両者の特質を明らかにする必要があるのではないだろうか。本稿では、先に確認した高麗青磁の精製品-粗製品(瓶類-椀類)の階層性が、日本列島中世施釉陶器の(なし)-粗製品(施釉陶器-無釉陶器(山茶椀))の階層性に対応する構造をもつことを指摘したい。

朝鮮半島高麗青磁 : 精製品-粗製品(瓶類-椀類)

日本列島中世施釉陶器 : (なし)-粗製品(施釉陶器-無釉陶器(山茶椀))

すなわち、朝鮮半島高麗青磁は中国大陸青磁の直接的な技術導入を契機として成立し半島独自の器形・装飾と美しい釉調を有する精製品-翡色青磁・象嵌青磁を生み出して「高麗化」ととげたが、一方の日本列島中世施釉陶器は外来技術の直接導入を欠くためか「翡色」レベルの精製品を生産せずに、中国大陸陶磁形態模倣の粗製陶器-灰釉陶器・鉄釉陶器を生み「古瀬戸」化をとげたことに、両者の最大の特質があるといえる。高麗施釉陶磁においては精製品と粗製品が分離したのに対し、日本列島中世施釉陶器においては施釉陶器と無釉陶器が分離した点も特徴的である。こうした、生産技術や意匠の違いのあり方に、中国大陸の周辺地域であった朝鮮半島と日本列島の、

中国大陸陶磁との“距離”の違いを想定することは、いささか穿った見方に過ぎるであろうか。中国大陸を当時の陶磁文化の中心的な地域として捉えた場合、周縁地域であった日本列島において生産された粗製施釉陶器の不安定な釉調—釉葉の流れ—が、後代の茶陶における窯変賞玩の成立を促す一因となったとも想定できることは、近現代の日本における陶磁鑑賞の様相を考える上でも興味深い点である(荒川正明『やきものの見方』(角川出版 2004 年)、拙稿「中世陶器賞玩の成立と展開」(『窯変の美』愛知県陶磁資料館 2008 年)を参照)。

4 朝鮮半島高麗陶器と日本列島中世焼締陶器

朝鮮半島の高麗陶磁には、高麗青磁—精製品・粗製品—の他に、高麗陶器の一群が存在するが、近現代の韓国・日本ともに関心は低く、韓国・ソウル市内の主要美術館・博物館や康津等の博物館においても展示例は少ない。しかし、窯跡の発掘調査例は蓄積されつつあり、筆者も 2009 年 7 月に全羅北道井邑市龍山洞遺跡において窯跡(3 区陶器窯(3))の調査を実見することができ、高麗陶磁全体を考察する上で欠くことができない存在である。高麗陶器は生産技術としては統一新羅時代の灰青色硬質陶器系窖窯の系譜を引き、還元焰焼成が行われる。器種は壺甕鉢・椀皿、高麗青磁系瓶壺から構成される点が特徴である。

一方、同時期の日本列島の中世陶器については、榑崎彰一氏によって中世陶器の基本分類—土師器窯・須恵器系窯・瓷器系窯の 3 系列—が提唱され、調査研究が展開されてきた。近年の研究動向は井上喜久男「総論 日本の中世陶器」(『窯変の美』愛知県陶磁資料館 2008 年)に窺うことができる。後二者の陶器窯については、須恵器系窯においては古代須恵器の生産技術の系譜を引き分焰柱のない窖窯で還元焰焼成が行われ、器種は壺甕鉢・椀皿と中国大陸陶磁系瓶壺から構成される点が特徴である。瓷器系窯においては古代灰釉陶器の生産技術の系譜を引き分焰柱のある窖窯で酸化焰焼成が行われ、器種は焼締陶器窯では壺甕鉢・椀皿、施釉陶器窯では中国大陸陶磁系瓶壺から構成される点が特徴である。ところで、こうした本州・四国島内の諸窯のほか、近年九州・南西諸島ではカムイヤキなど本島とは異なる様相を呈する陶器窯の存在が明らかとなっている。窯の形態は朝鮮半島の高麗陶器窯と類似して還元焰焼成が行われ、器種は壺甕鉢・椀などから構成される点が特徴で、高麗陶器系窯とも称されるべきものである。

朝鮮半島高麗陶磁と日本列島中世陶器の比較分析は、従来一部器種の形態比較によってなされてきた。本節ではこれを改め、両地域を中国大陸の周辺部として一体的に把握して比較考察することとしたい。そこで、日本列島中世陶器については、従来の須恵器系窯・瓷器系窯の系譜分類に加え、高麗陶器系窯を設定することとする。日本列島焼締陶器は総体的にはいずれも朝鮮半島硬質陶器の系譜をひくもので、高麗時代の朝鮮半島・日本列島の焼締陶器窯は、同時代朝鮮半島の技術系譜を強くひく高麗陶器系窯、前時代朝鮮半島系の系譜をひく須恵器系窯、須恵器系窯が日本列島で独自に変容した瓷器系窯に大分される可能性を以下に示す。

朝鮮半島	高麗青磁窯
	高麗陶器窯
九州・南西諸島	高麗陶器系窯
本四国島	須恵器系窯
	瓷器系窯

朝鮮半島において成立・展開した硬質陶器窯の生産技術は、5 世紀代前半には朝鮮半島南部から日本列島へ伝播し、古代須恵器生産が成立することとなった。“周辺地域”である日本列島にお

いては、須恵器生産技術は中世に至るまで須恵器系窯として残存する一方で、独自の技術革新を遂げて古代灰釉陶器生産を開始し中世には瓷器系窯として列島独自の生産が展開されることとなった。他方、朝鮮半島では統一新羅時代を経て高麗時代に至る過程で硬質陶器窯は高麗陶器窯へと変化し、朝鮮半島に比較的近い日本列島九州島や南西諸島へ新たに高麗陶器系窯が伝播・成立した。このように、日本列島中世陶器について、日本列島のみではなく朝鮮半島を含めて広く概観した時に浮かび上がってくるのは、朝鮮半島を源泉として日本列島へ波状的に陶器生産技術が伝播した姿ではないだろうか。ここには、政治・経済・文化の中心地から新たな言葉が発生して周辺へ伝播していき、周辺になればなるほど古い言葉が残存しているとする、日本語の方言生成モデルに共通する構造を見て取ることもできるであろう。また、こうした状況は東南アジア陶磁をはじめ、世界各地の陶磁においても認められるのではないだろうか。

5 結語

日本列島陶磁は原始時代以来近現代に至るまで、朝鮮半島・中国大陸・東南アジア・ヨーロッパなど様々な外国陶磁の影響を受けて成立・展開してきた。従来の「日本陶磁史」研究においては、日本列島におけるモデル受容形態の独自性や主体性が論じられることが多かったが、自民族中心主義に結びつく危険性をはらむものでもあった。本稿ではこれを克服し、グローバル化が進行している現代世界に見合う新たなパラダイムを構築すべく、朝鮮半島の高麗陶磁と併行期の日本列島陶器を統一的な視点—技術系譜・機能(器種)・中国大陸陶磁との模倣関係の要素によって総括的に比較考察し、両者の特質を明らかにすることに努めた。その結果、“モデル受容形態の独自性や主体性”は両地域に共通するものであり、共通性とその内容の違いにこそ両地域の特質を抽出できることを確認した。そして、日本列島陶磁においては、中国大陸陶磁や朝鮮半島陶磁に対する“周辺性”が重要な特徴となっている点を指摘した。

本分析は高麗陶磁と併行期の日本列島陶磁を対象としたが、日本列島陶磁史全般に適用可能な視点であると考えられる。例えば、日本列島における弥生土器や須恵器はともに朝鮮半島南部からの直接的な技術移入を契機として成立しており、その経緯については既に膨大な研究蓄積がある。しかし、朝鮮半島における無文土器や陶質土器の成立過程との比較研究については未開拓といってもよく、そうした比較研究を経て両地域の特質がより鮮明に浮かび上がってくるのではないかと思われる。

一般に、日本列島陶磁は奈良時代を境に、従来の朝鮮半島陶磁志向から中国大陸陶磁志向へと転換して古代・中世陶磁の基調をなしたとされている(例えば高橋照彦「日本古代における三彩・緑釉陶の歴史的特質」(『国立歴史民俗博物館研究報告』94 2002年))。しかし当該期にあっても中国大陸陶磁との影響関係において朝鮮半島陶磁と日本列島陶磁は高い共通性を有している。また、窯業地系譜上も本四国島における須恵器系窯の残存や九州・南西諸島における高麗陶器系窯の成立にみられる、朝鮮半島陶磁の日本列島陶磁への重層的な影響を認めることができる。中国大陸陶磁の直接技術移入を欠いた平安・鎌倉時代の日本列島陶磁は、朝鮮半島陶磁に比べ粗製の製品生産を展開することとなったが、釉調の不安定さが日本列島陶磁独自の窯変賞玩の成立を促す一因ともなった。

日本列島では本稿で取り扱った平安・鎌倉時代の後、室町時代後期から江戸時代初期にかけて、中国大陸や朝鮮半島陶磁の影響を受けて「桃山陶器」や肥前陶磁等が相次いで成立・展開することとなった。こうした近世陶磁の成立過程についても、朝鮮半島の粉青沙器・青花・鉄砂の成立過程

との比較研究が必要であろう。これらの陶磁は中国大陸陶磁の強い影響下にあった両地域における、陶磁の“朝鮮化”現象・“日本化”現象として一体的に捉えることもできるのではないだろうか。

現代日本に生活する人々は、この様にして成立した日本列島陶磁を列島独自の古陶や伝統的な陶磁として認識している。しかし実際には東アジアの周辺部に位置する朝鮮半島陶磁と日本列島陶磁の共通性と、地域毎の独自性を常に内包するものなのである。今後の朝鮮半島と日本列島の陶磁文化の調査研究については、各地域・時代・陶磁種類において個別に分析を行なうとともに、現在の国家とその領域観や民族意識を離れ、両者をともに広く極東アジア陶磁の一つとして捉え、比較分析を通じて、共通性と独自性を明らかにする視点が有効である。また、本調査研究で試みた生産技術要素のほか、生活様式・集団関係など多視点に基づく様式論的な研究が必要であろう。

共通性と独自性の認識の視点は、古陶磁のみならず、現代の陶磁による芸術やプロダクトデザイン、さらにはグローバル化が進行している現代世界を生きる上での判断視点として、今後ますます重要なものとなっていくに違いない。

本稿を執筆するにあたり、本調査研究報告の基となったトヨタ財団研究助成の共同研究者諸氏や、研究助成に基づく韓国・日本の調査先の諸機関・諸氏において、有益なご教示をいただきました。ここに感謝の意を表する次第です。